

# 大学生における家族機能と居場所感の関連について

—動的家族画を用いた検討—

17001PCM 笥 哲也

## 問題・目的

居場所という言葉は文部科学省（1992）が不登校に関する報告書で学校が「心の居場所」として機能する必要性について言及して以来注目されるようになった。心理学における居場所とはそこにいる他者との間で落ち着く・ほっとするといった安心感や、受け入れられているといった被受容感、ありのままの自分でいられるといった本来感を感じられる場であると理解され、対人関係を中心に据えた概念だとされてきた（西中，2014）。また中藤（2011）は大学生以降の青年期において居場所があるという感覚は、社会で生活していくうえで重要なものになると考察している。ある場所において、その場が居場所であると感じる感覚のことを居場所感という。居場所感について杉本・庄司（2006）は、小学生から高校生の間では家族を居場所として認識していると、居場所感が高くなることを示した。しかし先行研究では大学生に対しての検討は行われていない。また大学生が家族に対してどのような認識を抱いていると、居場所感に対してどのような影響を与えるのかといった、家族の具体的な状態を加味した検討は行われていない。そのため、本研究では大学生が家族を居場所として持っていることの影響に加え、大学生が家族をどのように認識しているのか測定し、その上で「本来感」や「被受容感」、「思考・休息」といった各居場所感に対してどのような影響を与えているのか検討することを目的とする。家族の状態を把握するための手段として、家族機能、居場所としての家族の有無、動的家族画に表れる家族認知の3つの視点から、居場所感に与える影響を検討することを目的とする。

## 研究1

### 1. 目的

研究1では質問紙調査法を用いて、家族機能

および居場所としての家族の有無の2点が、居場所感に与えている影響の検討を行う。研究1では次の2つの仮説について検討することを目的とする。仮説1「家族機能が良好なほど居場所感の得点は高くなる」。仮説2「大学生において最も重要な居場所として家族を挙げた人は、挙げなかった人より被受容感の得点は高くなり、思考・休息の得点は低くなる」。

### 2. 方法

**対象**：分析対象はA大学の在学学生148名（男性26名，女性119名，不明3名）だった。

**質問紙**：調査対象者の居場所に関する質問，居場所の心理的機能尺度（杉本・庄司，2006），家族機能測定尺度（立山，2005），フェイスシートが1枚，個別調査の依頼から構成された。

### 3. 結果と考察

因子分析の結果，居場所の心理的機能尺度は「本来感」，「被受容感」，「思考・休息」の3因子，家族機能測定尺度は「凝集性」，「適応性」の2因子が抽出された。家族機能測定尺度を円環モデルに基づいて3群に分類した。家族機能測定尺度を独立変数，居場所の心理的機能尺度を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果，「本来感」に有意な主効果が認められた（ $F(2,145) = 3.14, p < .05$ ）。「本来感」について多重比較を行ったところ，極端群はバランス群と比較して有意に得点が高い傾向がみられた（ $p < .10$ ）。このことから仮説1は支持されなかった。先行研究では家族を居場所として持つことが居場所感を高めると示唆されている。本研究の結果からは，家族を居場所として持つことと，家族機能の良好さは異なる影響を居場所感に与えていると示唆された。次に自由記述された居場所の「場所」および「居場所を構成する人」を集計した。重要な居場所を構成する人により一人群，家族群，他者群に分け，重要

な居場所を構成する人の3群を独立変数、居場所の心理的機能尺度を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、「被受容感」、「思考・休息」に有意な主効果が認められた（被受容感： $F(2,145) = 0.45, p < .01$ ；思考・休息： $F(2,145) = 27.28, p < .01$ ）。「被受容感」について多重比較を行ったところ、家族群は一人群と比較して有意に得点が高かった（ $p < .001$ ）。他者群は一人群と比較して有意に得点が高かった（ $p < .001$ ）。次に「思考・休息」について多重比較を行ったところ、一人群は家族群と比較して有意に得点が高かった（ $p < .05$ ）。また、一人群は他者群と比較して有意に得点が高い傾向が確認された（ $p < .10$ ）。このことから仮説2は支持された。小学生から高校生までを対象とした杉本・庄司（2006）でも類似した結果が示されていて、家族を重要な居場所として意識していることが「被受容感」と「思考・休息」に与える影響は小学生から大学生まで発達段階を通して一貫していることが示唆された。

## 研究2

### 1. 目的

動的家族画を用いて、調査参加者が持つ家族への無意識的側面の認識が居場所感に与える影響を検討していく。研究2では次の2つの仮説を検討することを目的とする。仮説3「動的家族画の印象評定が良好なほど居場所感の得点は高くなる」。仮説4「動的家族画で未描画家族がいない方がいる場合よりも居場所感の得点は高くなる」。

### 2. 方法

**参加者：**研究1に協力した者のうち14名（男性1名、女性13名）に対して行った。

**動的家族画：**個別で行った。使用したものはA4のケント紙と4Bの鉛筆2本、消しゴムだった。

### 3. 結果と考察

動的家族画の描画の分析を行うためにKFD印象評定尺度（大和田・阪，2007）を用いた。KFD評定尺度の下位尺度得点により参加者を高群と低群の2群に分類した。「活動・表出性」、「親密性」得点の高低群で居場所の心理的機能尺度の各下位尺度得点について対応の無い $t$ 検

定を行った結果、「活動・表出性」得点の低群は高群よりも有意に「本来感」得点が高かった（ $t(12) = 2.25, p < .05$ ）。また「親密性」得点の低群は高群よりも有意に「本来感」得点が高かった（ $t(12) = 2.90, p < .05$ ）。以上のことから仮説3は支持されなかった。続いて動的家族画実施の際、半構造化された質問で得られた回答を参考に、描画家族成員「無し群」と「有り群」に分類した。未描画家族成員の有無で居場所の心理的機能尺度について対応の無い $t$ 検定を行った。その結果「本来感」得点では未描画家族「有り群」は「無し群」よりも有意に「本来感」得点が高かった（ $t(12) = 2.64, p < .05$ ）。このことから仮説4は支持されなかった。これらのことから健康的な家族認知を持つ人ほど、居場所を感じる理由として本来感を意識しないと考えられる。

## 総合考察

研究1と研究2からは、一貫して健康的な家族認知を持つ人ほど居場所を感じる理由として本来感を意識しないという結果が得られた。北山（1993）は、人は居場所を作るため、少なからず本来の自分ではない偽りの自己を持つと述べている。このことから、人が居場所を持つとき、少なからず本来の自分というものは抑えられるのではないかと考えられる。また井村・石田（2012）は、家族の関係性が悪いと過度に自分を抑圧するが、家族の関係性が良いと、自分の抑制はある程度の自己表出を伴う、適度なものになることを示唆している。これらのことから健康的な家族では、成員は居場所を持つために本来の自分を抑えるが、その抑制はある程度自己表現も伴う適度なものとなるのではないかと推察される。そして適度に本来の自己の抑制を身につけた結果、居場所を感じる理由として本来の自分らしくいることをそれほど意識しなくなるのではないかと考えられる。本研究の結果からは、本来感など居場所感の高さが、単純に居場所があるという感覚を反映したものではない可能性が推察された。今後は居場所のあり方が居場所感にどのような影響を与えているか検討する必要があるだろう。